

更生保護法人「田川ふれ愛義塾」のはたす 社会的機能について

—理事長工藤良のエスノグラフィー—

Consideration rehabilitation service facility
'TAGAWA FUREAI GIJYUKU' fulfills its function in the society
— Director Ryo Kudo ethnography —

服 部 達 也

要 旨

更生保護施設である「田川ふれ愛義塾」は、その理事長である工藤良自身がかつて非行に走った後に立ち直ったという個人的な経緯をバックボーンとして立ち上げたもので、全国でも数少ない少年専用の更生保護施設、とりわけ女子少年については全国で唯一の女子少年専用更生保護施設として少年院出院者の受け皿になっている。その運営にあっては工藤の信念と矜持が大きく反映されているのであって、その点を工藤のエスノグラフィーを中心として具体的に考察してみる。

1. はじめに

2019年11月15日に本学で2019年度社会学部講演会が開催され「子ども達の居場所作り—生き辛さを抱えた少年少女への支援の在り方について—」という演題での講演がなされた翌日、その担当講師を筆者は関係者ともども錦秋の洛中散策に誘った際、「哲学の道」の名の由来に関わる哲学の泰斗、西田幾多郎博士の歌碑の前を通ったが、「人は人 吾はわれ也 とにかくに吾行く道を吾は行なり」と刻まれたこの歌碑を見た時、筆者はその人物に思わず「(碑文の内容は) あなたのことですね。」と語ってしまった。その人物、NPO法人「田川ふれ愛義塾」理事長工藤良（以下「工藤」という。）は、自身が

少年期に自らの身を焦がすかのような生き方をした後、妻を始めとする周囲の理解と協力の許、かつての自分のように生き辛さを抱えた青少年の立ち直り支援に関わっており、少年院から出院した後も支援の手を必要とする青少年たちの「最後のセーフティーネット」としての更生保護施設を運営している。

本稿では工藤のエスノグラフィーを中心として少年、若年成人の犯罪・非行の防止と社会復帰のためにはどのような支援を行えばよいのかの研究の一端を記してみたい。

なお、本研究調査については、『佛教大「人を対象とする研究」倫理規定』に基づき研究倫理審査申請を行い、承認されている。（承認番号 2019-29-A）

2. 更生保護施設について

更生保護施設とは、主に保護観察所から委託を受けて、住居がなかったり、頼るべき人がいないなどの理由で直ちに自立することが難しい保護観察又は更生緊急保護の対象者を宿泊させ、食事を給与するほか、就職援助、生活指導等を行う施設で、2018年6月1日現在で全国に103の施設があり、更生保護法人により100施設、社会福祉法人、特定非営利活動法人及び一般社団法人によりそれぞれ1施設が運営されている。

男性用施設が88、女性用が7施設、男女両用が8施設であり、総収容定員は2,385名で、男性が成人1,879名、少年321名、女性が成人134名、少年51名となっている。

3. 田川ふれ愛義塾設立への歩み

田川ふれ愛義塾（以下「同塾」という。）は2008年6月に工藤によって設立されているが、この設立経緯にはそれまでの工藤の人生の軌跡が大きく影響している。

工藤は、かつては日本のエネルギー資源の中心であった石炭産業で栄えた福岡県田川市で1977年に出生し、小学校2年時に父親のギャング等の生活の乱れを原因として両親が離婚、その後、工藤と弟を母親が養育するが、生活のため母が夜も働きに出だしたことを契機に工藤の素行は次第に荒れだしたものになっていく。

小学校高学年時から中学生の不良グループとの交遊が始まり、中学入学後に暴走族に加入、後に総長となり18歳の時に逮捕され少年院送致となって、少年院出院後も暴力団関係者との繋がりが絶えずに覚せい剤の密売等に関わり、22歳の時に覚せい剤の自己使用により逮捕、勾留されたが、既に妻子がいたこともありこの時を機に更生を決意し、執行猶予で釈放された後はかつての暴走族仲間を引き込んでボランティア団体を設立し活動を始める。

ボランティア活動を始めた当初は地域社会からは冷ややかに見られもしたが、次第に理解が広まる一方で、工藤自身の人生経験を頼りに子どもの不適応行動に苦しむ親達からの相談を受けるようになり、工藤は妻の協力の許、その子供たちを自宅に引き取って立ち直りのための援助、指導を始め出す。これが後の同塾の活動に繋がっていく第一歩であった。その後、評判が評判を呼び出し全国規模で少年少女を自宅に引き取ることとなったことによって手狭になったためアパートを借りて彼ら彼女らの居場所づくりを始め、これが今の同塾の前身となる。

そして、この活動が法務省においても注目された結果、2008年6月にNPO法人として正式に同塾を設立し、翌年8月には法務大臣から、NPO法人としては全国で初めての「継続保護事業経営認可」を受けた更生保護施設となり、今日に至っている。

4. 田川ふれ愛義塾の機能

(1) 少年に特化した運営

同塾の一番の特長は、全国的にも3か所しかない少年専用の更生保護施設であるということである。更生保護施設の多くがその入所対象者の主体を成人におき、定員の一部を少年枠として受け入れているが、入所対象者を少年に特化することでその可塑性と、逆にそれぞれが持っている生き辛さ・課題と的確に向き合っているように認められる。

そして、現在の同塾の運営として特筆すべきは平成28年からそれまでの男子寮に加え、新たに女子寮を設置して生き辛さを抱えた女子少年・若年女性の受け皿を作って、全国唯一の「女子少年専用更生保護施設」となったことである。

少年院入院者の中では女子の方が悲惨な性的虐待も含めた被虐待経験も持つ者が多く、家庭的な問題が少年院出院時にも解決せず、出院後の「居場所と出番」のない彼女たちにとっての

「最後の砦」となっており、同塾のこの機能は重要である。

(2) 柔軟な受入れ方針

工藤のポリシーが如実に表れているのが、各少年院からの引受けの依頼（正式には「環境調整依頼」という。）に対してよほどのことがない限り拒まないことである。

これが他の更生保護施設との顕著な差異であり、工藤によれば、更生保護施設として認可された以降のこの10年間で引取り依頼があったものの実質的に工藤の側から断ったのは1件のみで（知的障害のある少年を依頼されたが受け入れ態勢が十分に整っていなかった創設期であったため）、通常、更生保護施設への帰住が困難とされる非行内容や性格特性・行動傾向の者或いは過去に一度引き取ったが同塾で問題は起こした者ですら積極的に引き取っている。

ここには工藤自身が立ち直りとその後の自己実現を図っていく上で周囲からの支援が大きな糧となったことに由来する、生き辛さを抱えた少年たちへの支援においては「人生は出会いと環境」が必要という、彼の信念と矜持が存在する。

なお、同塾は、①少年院出院者、保護観察対象者の受入れ施設（更生保護施設）、②この①の対象者の法的入所期間終了後も引き続き支援の必要がある者等、任意的入所のための保護施設（自立準備ホーム）、③同塾のそもそもの出発点でもある親等からの依頼・委託による入所（純然たる「NPO法人」）、というそれぞれの機能形態があり、社会的インフラとしての役割を果たしていることが認められる。

(3) 関係機関との強固なネットワーク

同塾には、関連施設（共同運営施設）として「ふれあいの森」という福祉施設があり、同塾入所者で知的障害や発達障害を有する者や疑われる者がより適切な支援を円滑に受けれるように同施設への移行等、連携を行っている。また、入

所者の就労支援として地元の協力雇用主等とのネットワークを地道に構築しており、入所者の職場という「居場所と出番」作りに配慮されている。

5. 田川ふれ愛義塾の今後の課題と展望

工藤の現在の課題は、生き辛さを抱えた女子少年・若年女性の支援をいかにしてより適切、確実に行っていくかということである。

前述のように工藤の今日の活動に係る心象風景はある親からの生き辛さを抱えた女子少年の相談であったが、それが今なお工藤の胸中に強くある（この点につき、工藤を取り上げたNHK総合テレビの番組「逆転人生」（2019.11.18放映）の内容を参照）。

これが同塾における女子少年・若年女性の受け入れに繋がっており、更に工藤は、公的支援に繋がれなかったり、支援の窓口に足を運べない状態にある彼女らを探索、発見することでその後の支援に繋げていくことを目的とするアウトリーチ活動の重要性も認識し、現在、筑紫女学園大学人間科学部人間科学科心理・社会福祉専攻准教授大西良と同学大学院修士課程（人間科学専攻）生で社会福祉士でもある中山日向子らが主催する「Purple Aid（パープルエイド）」が福岡市内や北九州市内で夜間を実施している、社会での生き辛さを抱えた女性への支援のための街頭での「アウトリーチ」活動にも積極的に参加している。

このように工藤及び同塾は今後、更生保護施設という枠組みに留まらず広く他機関と連携して生き辛さを抱えた女性への支援の方向に向かっていくことを模索している。

6. おわりに

筆者（服部）はおそらく工藤という人物に「恋をしている。」のだと思う。

福祉支援分野の研究の第一人者である国際医療福祉大学大学院教授の大熊由紀子の著書に「恋するように、ボランティアを」があるが、およそ他人の支援を行いたいという衝動に駆られるとき、人はその相手（要支援者）の利益のため損得勘定なく自分を「捧げてしまう」ことも辞さないことがある。これはまさしく「恋」と同じかもしれない。

時として「恋」は、他者からは「割に合っていない。」「なぜ好きになったのか理解できない。」「盲目の恋」といった評価や揶揄を受けることもある。

工藤自身、時として他者が理解できない程の情熱と思い入りで生き辛さを抱えた少年・少女たちの支援にのめり込んでいる姿をみると、彼もきっと「他人には分からない『恋』をしている」のだろう。

工藤という「偉大な支援者」を「支援していく者の一人」としての筆者もまた工藤に「他人には分からぬ恋」をずっとしながら今後の活動を見守っていきたい。

参考・引用文献

- 工藤良, 2004『逆転のボランティア ごみ拾いが暴走族を変えた!』学研
 石井光太, 2019『虐待された少年はなぜ、事件を起こしたのか』平凡社新書
 法務総合研究所, 2018『平成30年版犯罪白書』
 三浦恵子, 2019『『当事者性』という観点から保護観察処遇と更生保護を考える』日本社会病理学会編『現代の社会病理 第34号』
 『毎日新聞』(2018.9.30朝刊) 第6面
 『朝日新聞』(2019.8.26夕刊) 第7面

(はっとり たつや

通信修士課程2回生加古川学園院長)